ROAD

輝く人たち No.24

分かりやすく　親しみやすく 3分間にかける思い

PROFILE
仲宗根 朋美

浦添市港川出身。
好きな天気：秋晴れ
趣味：英語の勉強、映画鑑賞
煎茶道（静中庵流煎茶道 師範免許状）

琉球朝日放送（QAB）の夕方ニュース「Qプラス」で、気象予報士として視聴者に分かりやすくお天気を伝える女性がいます。浦添市港川出身の仲宗根朋美さんです。

仲宗根さんが気象予報士を目指したきっかけは、幼い頃からテレビが好きで「いつかローカルテレビを面白くしたい」という思いに端を発します。

高校卒業後、県外の短大へと進学した仲宗根さんは、東京の服飾メーカーから就職内定をもらうも、昔からの思いを実現するため内定を辞退します。大学卒業後は、ラジオ沖縄やRBCでパーソナリティやテレビのレポーターなど、地元沖縄でタレントとして活躍するも「もっとマルチに活動したい」という思いから女優として活躍することを夢見て上京し、劇団東京乾電池や劇団山の手事情社に所属します。

「いつかは自分も」という思いで必死に演じることを学びますが、「自分が女優としてやっていくことに限界を感じた」と仲宗根さんは言います。

「ほんの一握りの人たちが表舞台で華々しく活躍する世界を目の当たりにし、劇団で活動する中で、自分の将来が見えず長くはやっていけない」。そう思い始めた仲宗根さんは沖縄でパーソナリティなどをしていた時のことを思い出します。

「自分の中で演じることと喋りの仕事を比較したときに、人前で話すことが自分には向いているのかな。人と勝負をしていく中で自分が得意なことを生かしていかないと勝ち抜いてはいけない」と仲宗根さんは考えるようになります。

そんな時、役者として活動する中で、ヘリコプターに乗ってお天気のレポートをする機会が訪れます。「東京の上空を飛んだ時に黄色い層が見えたんです。その正体が排気ガスや空気中のチリやホコリだということを知り、それらが黄色の空気の層になって見えることにとても驚きました」。この仕事をきっかけに気象に興味を持つようになった仲宗根さんは気象予報士の資格を取得すべく、劇団を卒業し予備校へと通います。

試験勉強は多岐に渡り、地上から上空までの大気の仕組みや地球規模のエネルギーの回り方、風の吹き方、気圧のこと、天気図を読み込み予報していくなど、朝から晩まで毎日12時間以上猛勉強した末に、7回目のトライで難関と言われる気象予報士の試験に合格します。「正直何度も勉強をやめようと思いました」と当時の心境を明かす仲宗根さん。その苦しさを乗り越えられたのは、一緒に勉強していた仲間の支えや、先生の存在が大きかったと言います。「本来は私が受けれるようなレベルの試験ではないのですが、基礎中の基礎から丁寧に分かりやすくあきらめないで手取り足取り教えていただいた。その先生がいなければ合格できなかったと思います」と当時を振り返り、感慨深そうに語ります。

しかし、合格してもすぐに気象予報士としての仕事があるわけではありませんでした。東京でラジオやテレビの仕事をしながら各局を回り、自らを売り込む日々。2年地道な活動を続けた結果、沖縄でQABの気象キャスターオーディションを受け合格。その努力が花開きます。

それから視聴者へお天気を伝え続けて今年でおよそ6年。仲宗根さんは気象キャスターとしてずっと大事にしていることがあると言います。「気象予報士の仕事は情報を分析して正確に伝えることですが、うみんちゅが肌感覚で天気を予想するように、その日の天気をみんながどのように感じているのか。感性を取り入れ伝えることを大事にしています」と仲宗根さんは言います。

3分という短い時間の中で、どうしたら視聴者に分かりやすく伝えられるかということを常に考えている仲宗根さん。その準備に毎日9時間以上を費やし、一切妥協することはありません。

「気象キャスターは、タレントや女優と違って、表舞台に出ている時間はほんのわずかです。それ以外は情報収集や天気図を読み込むなど終始情報をチェックしている時間のほうが長いんです。かける労力に弱音をはきたくなることもありますが、視聴者から寄せられる〝分かりやすかった〟という声を聞くと頑張ろうという気持ちになれます」と仲宗根さんは笑顔を見せます。

「〝ローカルテレビを面白くしたい〟その思いに変わりはありません」。そう話す仲宗根さんは今日もまた空を見上げ、自分の肌で天気を感じ、分かりやすさと親しみやすさを追求し、テレビの向こう側の視聴者へ天気を伝えます。